

ドイツ——キーワードとしての「市民社会」

中野 智世

「フィランソロピー」への関心の欠如
「市民社会」と「市民参加」-近年の研究プロジェクトから
課題-フィランソロピーと国家

「フィランソロピー」への関心の欠如

アメリカのドイツ史研究者アダムは、2004年に出版された編著『フィランソロピー、パトロネージ、市民社会——ドイツ、イギリス、北アメリカの経験から』(Adam, 2004a)の序文において、ドイツの歴史研究はフィランソロピーに関心を払ってこなかったと指摘している。

「19世紀のドイツの歴史は、長いあいだ、フィランソロピーの伝統に言及することなく描かれてきた。歴史家たちは、ドイツの文化、教育、社会にかかわる公共的な諸組織は地方自治体や国家によって設立・運営された、と論じてきた。ドイツの市民(ブルジョワジー)についての広範な研究にもかかわらず、最もブルジョワ的行為——フィランソロピー——が考慮されることはなかった。歴史家は、ドイツのブルジョワジーは社会に対する責任意識を育むことはなかったと、社会・文化的な公共機関を財政的に支える責任はむしろ国家に期待された、と論じてきたのである⁽¹⁾。」

実際、ドイツの歴史研究においてフィランソロピーをタイトルに掲げたものは稀である。管見の限りでは、上述のアダム編による英語の論文集のほか、2006年、スイスの歴史学雑誌*Traverse*の組んだ特集号『フィランソロピーと権力』(*Philanthropie und Macht*, 2006)、最近では、2009年に出た国際比較の論文集、『ヨーロッパ市民社会における宗教とフィランソロピー』(Liedtke, R./Weber, K., 2009a)⁽²⁾のみである。これらの論文集は、いずれもドイツ以外の国で企画された国際的なプロジェクトであり、ドイツだけでなく、各国の歴史研究者が参集した国際比較研究であった。

このように、ドイツのナショナル・ヒストリーにおいてフィランソロピーを掲げた個別研究やプロジェクトがあまりみあたらないのは、以下のふたつの理由による。

まず、ドイツ語の*Philanthropie*という言葉が、英語のフィランソロピーとはことなって、芸術・

(1) Adam, 2004b, S. 3.

(2) 同書は、ロンドンのロスチャイルド文書館を中心に企画された研究プロジェクト、「ヨーロッパにおけるユダヤ・フィランソロピーと社会発展。ロスチャイルドを例として」の研究成果の一部である。

文化振興や改革教育学運動など限定された意味しかもたないことである。ドイツ語には、英米圏のような上位概念としての「フィランソロピー」に当たる言葉は存在しない⁽³⁾。

そしてもうひとつ、まさにアダムが指摘する通り、英米圏でいうフィランソロピーは、ドイツにおいては考慮に値しない領域として関心を向けられなかったことがある。周知のように、20世紀の「社会国家」ドイツにおいて、文化、教育、福祉といった領域における公的部門の比重は英米に比べはるかに大きかった。ながらく無償であった大学教育、公的補助金によって支えられた美術館やオーケストラ、失業や老齢、疾病に対する手厚い社会保障制度などはその象徴であり、富裕者の寄付を想起させるようなフィランソロピーは「アメリカの発明品」⁽⁴⁾であるとみなされていた。

しかし、近年ドイツにおいても、国家や公的なセクター以外の「公共性の担い手」への関心が高まってきた。その背景には、20世紀末以降すすめられた「社会国家の改編」、すなわち国家福祉の後退と、市場や非営利セクターを含む福祉供給主体の多元化といった状況がある。この10年来、公益を目的とした財団設立や寄付・募金、あるいは公益的諸活動への市民参加の促進は、「国家の失敗」と「市場の失敗」を補うものとして、盛んにアピールされる政策的課題となっている⁽⁵⁾。

こうしたアクチュアルな動向を背景に、ドイツの歴史研究においても英語圏のフィランソロピーに類する諸活動が次第に着目されるようになってきた。そこで以下では、こうした研究領域が全体としてどのような枠組みで取り上げられているのか、近年の方向性を示唆する研究プロジェクトを紹介しながら、ドイツの「フィランソロピー的なもの」の研究動向を探ることにしたい。

「市民社会」と「市民参加」－近年の研究プロジェクトから

ドイツの歴史研究において、最初にフィランソロピーという領域を明示的にとりあげたのは、冒頭で引用したアダム編の論文集、『フィランソロピー、パトロネージ、市民社会——ドイツ、イギリス、北アメリカの経験から』(Adam, 2004a)であった。本書は、すでに分厚いフィランソロピー研究の蓄積があった英米に、カナダ、ドイツを加えた国際比較研究である。編者であるアダムは、フィランソロピーの目的を、国家と市場、そのどちらによっても満たされない社会、文化、教育的サービスを提供することとし、そうした観点からみれば、19世紀のドイツはアメリカと同様に「フィランソロピック」な社会であったと結論づける⁽⁶⁾。

無論、ドイツ本国において、「フィランソロピー的なもの」の歴史研究がなかったわけではない。しかしそれらは、慈善(Wohltätigkeit)、民間福祉(freie Wohlfahrtspflege)、自発的なアソシエー

(3) ちなみに、英語圏ではフィランソロピーとはほぼ同義で用いられるチャリティ(ドイツ語ではCaritas, Karitas)も、ドイツにおいては基本的には宗教的な、厳密にはカトリックによる慈善事業のみを指す言葉である。Rassem, 1992, S. 631f. チャリティ、フィランソロピー、そしてウェルフェアが、英・仏・独語においてそれぞれいかに異なる概念として用いられているかについては、以下の比較分析を参照。Weber, 2009, S. 21 ff.

(4) Adam, 2004b, S. 3.

(5) こうしたドイツの現状については、以下を参照。坪郷, 2007, Zivilgesellschaft. Engagement zwischen Staat und Markt, 2009.

(6) Adam, 2004b, S. 3.

ションである協会 (Verein) 活動, 名誉職 (Ehrenamt) ・ボランティア活動, メセナ (Mäzenatentum), 財団・基金 (Stiftung), 寄付 (Spenden), 募金 (Sammlung) 活動など, それぞれ別個の研究対象として, 別々の枠組みで検討されてきた。これらの研究テーマが, 次第にひとつの文脈でとらえられるようになっていくのは2000年代に入ってからである。ただし, そこでキーワードとなったのは「フィランソロピー」ではなく, 「市民社会」あるいは「市民参加」といった概念であった。ドイツにおいて, 「市民社会」はすでに1990年代から流行語となっていたが, このきわめてアクチュアルな概念を歴史学に導入したのは, ドイツ歴史学界の重鎮ユルゲン・コッカである。

コッカは, 近年では19世紀・市民研究の国際比較で知られるが, ここで当初用いていた「Bürgergesellschaft (ブルジョワ社会)」を「Zivilgesellschaft (市民社会。英語のcivil society)」と言い換え, 「市民社会」を新たな分析概念として提示した⁽⁷⁾。2000年に発表された『東西におけるヨーロッパ市民社会——概念, 歴史, チャンス』(Hildermeier, M./Kocka, J./Conrad, C., 2000)において, コッカは以下のように述べている。

「『市民社会』についての近年の議論の中心には, 国家, 市場および私的領域の間にある社会的自己組織の空間, つまり, 協会, サークル, ネットワーク, 非政府組織 (NGO) などの領域がある。(…) この領域は, 公的論議, 紛争と協調の空間であり, 諸個人とグループの自立的空間である。また, 活力とイノベーションの領域であり, 公共の福祉 (…) のために努力する場でもありうる。(…) このような狭義の市民社会概念は, 歴史的分析においても有意義であろう。この概念は, 以下のような領域の歴史研究へとわれわれを導くからである。すなわち, 協会や協同組合, コミュニケーションと公共圏, 自治, メセナ, 財団, そして市民参加のその他の諸形態へと⁽⁸⁾。」

このように, コッカは, 「国家, 市場および私的領域の間」にあるボランティアな組織や活動を「市民社会の歴史」という文脈でとらえなおすことを提言した。ここでの「市民社会」とは, 個人の独立と自発性, 公益性へのアンガージュマン, 多様性の承認, 非暴力といった社会行動の類型が支配する, 一つの理想的な「人間の共存」の在り方であり, ボランティアな公益的諸活動はその発露とみなされた。コッカにとって, こうしたドイツの「市民社会の歴史」を描くことは, かつての「ドイツ特有の道論」で主張されたドイツの負の特異性を相対化するためにも重要であった⁽⁹⁾。

2004年に刊行された論文集, 『歴史としての市民社会——19, 20世紀研究』(Jessen, R./Reichardt, S./Klein, A., 2004) は, 「市民社会」を歴史学の立場から検討した最初のものであった。ここでは, 4部構成のうちの第2部が「フィランソロピーとメセナ」に割り当てられている。執筆者は冒頭で挙げたアダム, そして同じくアメリカ人研究者のメニングァーで, 住宅改良と芸術振興を例としたアメリカおよびドイツの財団研究が扱われている。また, 2007年には, コッカ自ら編者となった『歴史と社会』誌の特集号, 「贈与, 基金, 寄付」が出た (Schenken, Stiften, Spenden, 2007)。ここで

(7) コッカは, 当初, 文化・芸術振興を意味する「メセナ」概念を拡大して, 社会的分野を含めた「公共的目的のための私的財源の提供」と新たに定義することを提案したが, 定着しなかった。Kocka/Frey, 1998, S. 7. なお, ドイツ語の「市民社会」概念, および「市民社会」の歴史研究については, 以下も参照。山本, 2009。

(8) Kocka, 2000, S. 21f. コッカの市民社会論については, 山口, 2004。

(9) Vgl. Kocka, 2007, S. 8.

は、上記の「市民社会の歴史」という文脈で、先述のアダムのほか、若手・中堅のドイツ人研究者が、19世紀末から戦後までのドイツにおける財団や基金を分析している。

どちらもアダムが執筆者として名を連ねていることから明らかなように、財団・基金といった領域は、アメリカ人歴史研究者の協力を得つつ進められた。こうした流れのひとつの到達点ともいえるのが、2009年に出版された論文集『寄付者、募金者、メセナの担い手。アメリカ・ドイツの歴史的比較』(Adam, T./Lässig, S./Lingelbach, G., 2009a)である。同書は、2006年にワシントンDCにあるドイツ歴史研究所の主催で開かれた国際会議、「歴史の中のフィランソロピー。ドイツとアメリカのパーспекティヴ」での報告をもとにしたもので、ドイツ語で発表されたためタイトルにフィランソロピーという言葉こそ掲げられていないものの、明らかにフィランソロピーを対象としたものといえよう。

同書は、フィランソロピーを「文化、社会福祉、教育、(…)発展途上国援助など、公的な課題に対する私的な資金提供」⁽¹⁰⁾と定義する。そして、大西洋間の交流、政治と公共性、財団と都市エリート形成、芸術振興、私的な発展途上国援助という5つのテーマ領域に沿って、ドイツとアメリカ両国のフィランソロピーの共通性と差異を検討している。本格的な2国間比較研究の第一歩といえよう。

アダムらのフィランソロピー研究が、公共的課題への私的な「資金」提供を中心に扱っているのに対し、名誉職、ボランティアといった「参加」の側面にも着目したのが、2005年に出版された『ヴェストファーレン地域史研究所年報』の特集号、「名誉職とメセナ。歴史の変遷の中の市民社会」(Ehrenamt und Mäzenatentum, 2005)である。市民の自発的諸活動、「市民参加(Bürgerschaftliches Engagement)」を、その歴史上のプロトタイプである名誉職とメセナを切り口として分析しようとするもので、地域政治、司法、芸術振興、救貧および社会政策という4つの領域を柱として、地域政治における名誉職制、市民の司法参加、王侯貴族のメセナや芸術協会、救貧・慈善事業におけるボランティア、寄付・募金活動など幅広いテーマがとりあげられている。

きわめて現代的な関心からフィランソロピーをとりあげるコッカやアダムとはことなっており、ここでは、「市民参加」の前近代的ルーツに着目する⁽¹¹⁾。たとえば、公的業務における名誉職は実際には義務であって、近代的な「自発的な参加」といった行動論理は必ずしもあてはまらないこと、募金活動においても、ミリューへの帰属意識や共同体からの圧力がしばしば決定的であったこと、また、市民参加の原型とみなされる「協会」活動においても、その動機はしばしば「世界観の防衛」であって、異なる価値への寛容や妥協の余地は大きくなかったことなど、歴史の現実における「市民参加」は、理想のユートピアとしての「良き市民社会」の確立には必ずしも結びつかないことが示唆されている。

もうひとつ、近年の研究としてあげておきたいのは、冒頭でも挙げた『ヨーロッパ市民社会における宗教とフィランソロピー』(Liedtke, R./Weber, K., 2009a)である。本書は、英仏独、スイス、日本など様々な国々を対象とした比較研究であるが、二人のドイツ人歴史研究者が編者となってド

(10) Adam/Lässig/Lingelbach, 2009b, S. 9.

(11) Vgl. Gorißen, 2005, S. 9f.

イツ語で発表された。タイトルのフィランソロピーについては、ドイツ語で一般的な文化・芸術振興ではなく、より広義の、「社会的領域における公共的アンガージュマン (gemeinnütziges Engagement)」として用いると断っている。ここでも、序論は市民社会論から書きおこされており、慈善・博愛事業、メセナ、基金など同書がとりあげるテーマ群は「市民社会的領域」あるいは「フィランソロピー的諸活動」と表現され、市民社会とフィランソロピーが近似性のある表現として用いられていることがうかがえる。

この論文集の最大の特徴は、ボランティアな公益的諸活動と宗教との関係に着目している点にある。従来の市民社会研究においては、宗教は差別や排除、対立の源としてしばしば捨象されがちであったが、近年の歴史研究では、激変する19世紀ヨーロッパの中で、「変わらない普遍」としての宗教が「市民社会の形成」に果たした役割が注目されるにいたっている⁽¹²⁾。同書においても、例えば、キリスト教の信仰覚醒運動と慈善事業・社会活動のかかわり、宗教的マイノリティであるユダヤ・フィランソロピーの社会的機能などが分析されている。

以上でみてきたように、ドイツ史における「フィランソロピー的なるもの」は、アメリカの歴史研究の影響を受けつつ次第に着目されるようになった領域であり、ドイツ本国においては、「市民社会」、「市民参加」といった、より包括的なキーワードのもとで分析が進められてきた。こうした領域の歴史研究は多数の国際プロジェクトによっても推進されており、今後も進展が期待される。

課題－フィランソロピーと国家

ドイツの歴史研究において、英米のフィランソロピー概念は非常に慎重に扱われ、いまだに市民権を得ているとはいえない。その背景には、英米の「フィランソロピー」が、多かれ少なかれ国家や公的部門を捨象した領域や空間をイメージさせることがある。国家・公的なものにフィランソロピーを対置するという二項対立は、少なくとも19世紀末以降のドイツにはあてはまらない。19世紀、民間の自発的な諸活動によって担われていた社会的課題の多くは、20世紀初頭には次第に公的な手にゆだねられ、国家の引き受けるものとなった。社会国家の正当性が問われ、市民のアンガージュマンに期待がかけられる21世紀の現在においても、ドイツでは、英米に比べはるかに多くの領域がいまなお公的部門の下にある。

ドイツの「フィランソロピー的なるもの」の歴史を問うには、こうした公的部門、とりわけ国家との関係を常に視野に入れる必要がある。歴史的にみれば、そもそも、私的アンガージュマンと公的なそれとの境界は常に流動的であった。公私の在り方そのものを俎上に載せて、きめ細かく検討していく必要がある。そうした意味では、現在、アメリカとの比較でしばしばとりあげられる文化・芸術、教育といった分野だけでなく、社会的領域における私的アンガージュマンにもこれまで以上に目をむけていく必要があるのではないだろうか。こうした領域では、救貧や社会政策といったドイツ社会国家の根幹にある公的諸制度との関わりを、政治・経済的諸状況をも鑑みつつトータルに問わざるを得ない。それによって、公私それぞれのダイナミズムと社会国家とのかかわりにも

(12) Liedtke/Weber, 2009b, S. 11ff.

光をあてることができよう。

かつてのような「福祉国家へのサクセス・ストーリー」として、あるいは「市民社会」および「フィランソロピー」の勝利として歴史を描くのではなく、公私双方に目を配りながら両者の関係性を丁寧にきめ細かく解きほぐしていくこと、こうした作業は、「市民社会」に対する近年の過剰な期待に警鐘を鳴らし、何をどこまで市民の私的アンガージュマンにゆだね、どこからは国家や公的部門が引き受けるべきなのかを冷静に見極める手がかりともなるはずである。

(なかの・ともよ 京都産業大学経営学部准教授)

【文献リスト】

- Adam, Thomas (eds.) (2004a) *Philanthropy, Patronage, and Civil Society. Experiences from Germany, Great Britain, and North America*, Indiana University Press, Bloomington.
- Adam, Thomas (2004b) "Introduction", in: Adam, 2004a, S. 1-12.
- Adam, Thomas/Lässig, Simone/Lingelbach, Gabriele (Hg.) (2009a) *Stifter, Spender und Mäzene. USA und Deutschland im historischen Vergleich*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart.
- Adam, Thomas/Lässig, Simone/Lingelbach, Gabriele (2009b) "Einleitung", in: Adam/Lässig/Lingelbach, 2009a, S. 7-14.
- Ehrenamt und Mäzenatentum – Grundlagen der Zivilgesellschaft im historischen Wandel (2005), in: *Westfälische Forschungen*, Aschendorff Verlag, Münster.
- Gorißen, Stefan, "Ehrenamt und Mäzenatentum: Eine Einführung", (2005) in: Ehrenamt und Mäzenatentum, 2005, S. 1-16.
- Hildermeier, Manfred/Kocka, Jürgen/Conrad, Christoph (Hg.) (2000) *Europäische Zivilgesellschaft in Ost und West. Begriff, Geschichte, Chancen*, Campus Verlag, Frankfurt/N.Y.
- Jessen, Ralph/Reichardt, Sven/Klein, Ansgar (Hg.) (2004) *Zivilgesellschaft als Geschichte. Studien zum 19. und 20. Jahrhundert*, VS Verlag für Sozialwissenschaften, Wiesbaden.
- Kocka, Jürgen/Frey, Manuel (1998) "Einleitung und einige Ergebnisse", in: Kocka, Jürgen/Frey, Manuel (Hg.), *Bürgerkultur und Mäzenatentum im 19. Jahrhundert*, Fannei&Walz Verlag, Zwickau, 1998, S. 7-17.
- Kocka, Jürgen (2000) "Zivilgesellschaft als historisches Problem und Versprechen", in: Hildermeier/Kocka/Conrad, 2000, S. 13-39 (ユルゲン・コッカ「歴史的問題および約束としての市民社会」松葉正文・山井敏章訳『思想』953号, 2003年, 34-57頁。).
- Kocka, Jürgen (2007) "Vorbemerkung", in: *Schenken, Stiften, Spenden*, 2007, S. 5-9.
- Liedtke, Rainer/Weber, Klaus (Hg.) (2009a) *Religion und Philanthropie in den europäischen Zivilgesellschaften. Entwicklungen im 19. und 20. Jahrhundert*, Ferdinand Schöningh, Paderborn/München/Wien/Zürich.
- Liedtke, Rainer/Weber, Klaus (2009b) "Einleitung. Zivilgesellschaften im Spannungsfeld von Religion, Staat und Philanthropie", in: Liedtke/Weber, 2009a, S. 9-17.
- Philanthropie und Macht, 19. und 20. Jahrhundert* (Traverse. Zeitschrift für Geschichte/Revue d'histoire) (2006) 1, Chronos Verlag, Zürich.
- Rassem, Mohammed (1992) "Wohlfahrt, Wohltat, Wohltätigkeit, Caritas", in: *Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialer Sprache in Deutschland*, Bd. 7, hg. v.

Brunner, Otto/Conze, Werner/Koselleck, Reinhart, Klett-Cotta, Stuttgart, S. 595-636.
 Schenken, Stiften, Spenden (Geschichte und Gesellschaft, Jg. 33, H. 1) (2007) Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen.
 Weber, Klaus (2009) “》 Wohlfahrt 《,》 Philanthropie 《 und 《 Caritas 《: Deutschland, Frankreich und Großbritannien im begriffsgeschichtlichen Vergleich”, in: Liedtke/Weber, 2009a, S. 19-37.
 “Zivilgesellschaft. Engagement zwischen Staat und Markt” (2009), in: Deutschland, Nr. 3, Juni/Juli 2009, Societäts-Verlag, Frankfurt am Main, S. 40-65.
 坪郷實 (2007) 『ドイツの市民自治体—市民社会を強くする方法』生活社。
 山口定 (2004) 『市民社会論—歴史的遺産と新展開』有斐閣。
 山本秀行 (2009) 「訳者解説」シュテファン＝ルートヴィヒ・ホフマン著, 山本秀行訳『市民結社と民主主義1750～1914』岩波書店, 143-151頁。

<p>戦間期日本の社会研究センター 大原社研と協調会 高橋彦博 著 A5判上製 364頁 6,090円</p>	<p>■両機関の営みに共通する地下水脈を探索する</p> <p>協調会の研究 法政大学大原社会問題研究所 編 梅田俊英・高橋彦博・横関至 著 A5判上製 388頁 5,460円</p>	<p>■社会労働運動史の定説を覆す、再評価の試み</p> <p>都市・農村生活調査資料集成Ⅰ・Ⅱ Ⅰ A5判上製 全12巻 総4,760頁 Ⅱ A5判上製 全12巻 総6,080頁 揃262,500円</p>	<p>■歴史的価値の高い精密な生活実態調査の記録</p> <p>日本社会労働運動資料集成Ⅰ・Ⅱ (マイクロフィルム版) Ⅰ 一九二〇～三〇年代 全114リール 揃2,730,000円 Ⅱ 一九三一～四〇年代 全62リール 揃1,575,000円</p>	<p>■大原社研が保管する膨大な協調会基幹史料を公開</p> <p>『産業福利』復刻版 (全3回配本) Ⅰ 一九二七～三三年 A4判上製 総2,710頁 揃294,000円 Ⅱ 一九三四～三八年 A4判上製 総2,814頁 揃294,000円 Ⅲ 一九三九～四四年 A4判上製 総2,500頁 揃294,000円</p>	<p>■わが国労働安全運動の源流と展開過程が明らかに</p> <p>労働雑誌『人と人』復刻版 (全2回配本) Ⅰ 菊判上製 全11巻 総5,882頁 揃294,000円 Ⅱ 菊判上製 全11巻 総4,974頁 揃294,000円</p>	<p>〔協調会史料〕 法政大学大原社会問題研究所 監修 協調会研究会 (梅田俊英・高橋彦博・横関至) 編</p> <p>■労働問題を「人」の問題として捉えた最初期の雑誌</p>
---	--	--	---	--	---	--

啓蒙雑誌。教育の機会均等の必要を論じ、無産政党の動向を詳報。
 広く労働者の購読に供する目的で、一九二一年に協調会が創刊した大衆

柏書房 〒113-0021 東京都文京区本駒込 1-13-14 TEL.03-3947-8251 FAX.03-3947-8255
<http://www.kashiwashobo.co.jp> <価格税込>